# 僧　伽

2015年 夏号

第90号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL（076）241－5219
題字　本多　千翠

浄土のならいにて、
破戒無戒の人、
罪業深きもの、
みな往生すとしるべし
『尊号真像銘文』

『尊号真像銘文』
親鸞聖人が門弟に名号や阿弥陀如来の絵像を与えられた時に添えた銘文に付けた説明文を集めたもの。

## 一人だけれど一緒

徳法寺　杉谷　浄

今回の写真は、二面の「自分色」を書いて下さったミカさんが映した、ラビ・オピ村の、地震で壊れた家と、その家の女の子です。十一歳ぐらいだそうです。

ミカさんは、地震で被災した中でも特に生活に困っている家族に山羊を贈るという支援活動をしています。この女の子のお母さんシャンタ・ミジャールさんには、母山羊と息子山羊が支給されました。息子山羊は十月のお祭りまで育てて食肉用に売ります。母山羊は子供を産ませます。現金を渡すとすぐに使ってしまうかもしれないので、これは上手な方法だと思います。

ネパールの農村では、石と土を積み重ねただけの簡単な作りの家が多く、耐震性は全くありません。写真に写っている木は柱ではなく、屋根に使っていた梁のようです。現在、彼らはトタン板で作った簡易住宅に暮らしています。屋根の上には毎年ある長時間の計画停電に備えてNGO団体が貧困家庭に配ったというソーラーパネルが置いてありました。これで電球が四時間ぐらいは点灯するそうです。

東日本大震災もそうでしたが、苦しんでいる人に対して、他の誰かが出来ることは限られています。誰もその人の人生を代わってあげることは出来ません。一人で生まれ、一人で歩み、一人で死ぬしか無いのです。他人の痛みを知ことなど出来ません。ただ、寄り添うことは出来ます。一緒に泣くことも出来ます。一緒に笑うことも出来ます。一緒に歌うことも出来ます。一緒に怒ることも出来ます。赤ちゃんに笑いかけると笑顔を返してくれるように、分からないかも知れませんが通じることは出来るのです。誰かが他の人の力を僅かでも支えとしてくれたなら、今度はそのことが支えた人の支えとなります。

浄土とは、如来の慈悲が成就した世界であると説かれています。一人ひとりが違う人生を違う身体で生きている私達ですが、だからこそ、身を寄せ合いながら、他人を思いやる心を忘れたくはないものです。そのことこそが生きる力となるのですから。

# スンダリ・ミカ

## ネパール大地震を経験して

二〇一五年四月二十五日にマグニチュード七・九の大地震がネパールを襲いました。首都カトマンズ在住の日本人歌手、スンダリ・ミカさんは幸いなことにご無事で、地震発生直後から支援活動を始めていらっしゃいます。原稿は五月初めにいただきました。

地震発生から十日経過して私的にも気持ちが落ち着いてきたので、現在の心境を吐露します。

二〇一一年の三月十一日はネパールにいました。日本語学校で授業をしていました。日本に地震が来たという話を同僚から聞きましたが、いつものことだと思い、のんびりと授業を終えてからネットで情報を収集し始めてから、にわかに青ざめたという記憶があります。日本にいるネパールの方も、その時私が青ざめた時のような落ち着かない気持ちでいるのでしょう。

私は三月十一日の地震発生後、四月二十日に日本に一時帰国しましたが、ネパール人の皆さんも帰れるお金と帰れる仕事の余裕があれば帰りたいですよね。お気持ちとても良くわかります。あの時私はお金の余裕はなかったけど仕事の余裕があったので一ヶ月帰りました。あの時帰ったおかげで、日本の地震の被害状況を見ることができ、今ネパールでその時の経験と思いを使って活動することができています。やはり種は蒔くべきだとしみじみ思っています。種をまくということは明日を信じるということと、不安な自分を納得させるという意味でとても建設的な儀式だと思っています。蒔きましょう。今この瞬間にも。

ネパールで被災した人たちが大変な思いでいるときに、自分だけ安全な場所、暖かい部屋、ひもじい思いのない食事に甘んじていいのかと思う気持ちはいつもありますが、一つだけネパールにいる私にないものが家族です。これはとても寂しいことだと思いながら日々暮らしています。ご家族や親戚が亡くなられた方には心からお悔やみ申し上げます。しかしながら、新しいネパールの再建のためにも今生きているということを素直に喜び、周りの人たちと分かち合いながら前を向いて歩いていきましょう。

私の日本の家族たちはネパールで略奪や盗難や買い占めがあるのではないかと心配していましたが、私の周りではそのようなことは聞きませんでしたし、私自身も体験していません。日本でさえもそういう行為があったのだから、ネパールで思ったより少ないというのは誇らしいことなのではないかと私は思っています。

それから、家にはテレビがないので毎日ラジオを聞いているのですが、メンタルケアの番組が多いのが印象的であり、意外でした。地震発生後数日たった後にも、不安からくる動悸、眠れないでいるという相談に対して精神科医が丁寧に回答や対策を教授している番組が毎日放送されています。生き残った人たちが現在抱えている私だけが生き残ってしまった、明日からどうして暮らしていったらいいのか、という無力感について、「生きているだけですべてが上手くいっているのだという思いでいて下さい、不安なときは周りの人達に自分の気持を打ち明けて抱え込まないようにして下さい」、とラジオから訴えているのを聞いていると、私も気持ちが軽くなり、今できることをやっていくしかないという気持ちになります。

地震発生時刻は午前十一時五十六分二十六秒（ネパール標準時（NST））と発表されていますが、ネパールと三時間十五分の時差がある日本では午後三時十一分です。日本から遠く離れた国での出来事ではありますが、不思議な御縁でつながっていることを感じます。引き続きネパール震災支援を続けていきますので、ご協力よろしくお願いします。

プロフィール
スンダリ・ミカ
東京都大田区生まれ。一九九三年に初めてネパールを旅行し、ネパール民謡に強く魅せられる。九九年、カトマンズに渡り、歌唱をミラ・ラナ、打楽器をヌチェ・バハドール・ダンゴールに師事。日本人として初めてネパールで歌手デビュー。二〇〇三年1stアルバム『スンダリ』、〇八年2ndアルバム『アサバディ』をリリース。〇四年、国王よりゴルカダクシンバフ勲章勲四等を受け、一一年、ネパール観光年の観光大使を務める。「スンダリ」とはネパール語で「美しい」の意。
https://www.facebook.com/sundari1016

# 真宗人物伝　第三十七回

徳法寺　杉谷　淨

## 善念（ぜんねん）

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第十二番である善念です。

善念が親鸞聖人の弟子に入った経緯はいくつか伝えられていますが、善念を開基としている善重寺が伝えているのは次の様なものです。

善念房は、俗姓を三浦義重という武士でしたが、十八歳の時、悩むことがあって、鹿島神宮へお参りに行きました。その帰り、桜川という川にさしかかった時、麻に墨染めの衣を着た僧侶が川を渡ることができず困っていました。そこで三浦義重は、その僧侶を背負って川を歩いて渡ります。渡り終わった後、三浦義重は抱えていた悩みを、その僧侶に相談しました。その悩みとは、このまま武士でいることが本当に正しいことなのか、本当の強さとはどういうことなのか、ということでした。この僧侶こそが親鸞聖人で、教えに救われた三浦義重はそのまま弟子となり、善念という法名を賜わったといいます。

『二十四輩参拝図会』には、三浦義重のことを三浦義明の弟岡崎義実の孫与市実忠の三男と書かれています。三浦義明は、伊豆で挙兵した源頼朝の下に参じますが、石橋山の合戦で平氏方に敗れ、討ち死にします。その子義澄も父の意思を受け継ぎ頼朝と合流し、北条氏とともに鎌倉幕府の中で中心的地位を得ることになりました。義澄の甥和田義盛も平家追討の中心として活躍しますが、北条氏と対立して滅ぼされてしまいます。この時に善念の父実忠も義盛と共に討ち死にをしたと伝えています。もしこれが事実であるならば、三浦義重が悩んでいた内容と一致します。実際、戦乱が続いていたこの時代には、同じような理由で多くの武士が出家して僧侶となっています。

墨染めの衣とは、僧位を持たない僧侶や修行中の僧侶、戒律を破った僧侶が着ていた衣で、黒というよりは薄墨色というネズミ色でした。当時の貴族は喪服にこの色を使っていたようです。絹のものなら綺麗に黒色がでますが、麻ではざらざらした色合いになります。今でも僧侶の葬儀の時に、喪主がこの衣を着ることがあります。

親鸞聖人がこの衣を着ていたということは、質素な生活をしておられたということです。当時の鹿島神宮には多くの仏教経典が置かれていましたから、親鸞聖人も通われていたようです。二人が出会ったのは、その帰り道だったのでしょう。また、小さな川は歩いて渡るか、簡単な橋しか架かっていないことが多かったので、大きな雨が降ると足止めされることも珍しくなかったようです。それにしても、供も付けずに一人で歩いていたとすれば、まだ関東に来て間もない頃だったのでしょうか。

悩んでいなければ、いくら手助けしたとはいえ、初めて会った僧侶に相談することもなかったでしょう。また、たとえ悩んでいたとしても、この時親鸞聖人と出会えたのは偶々のことです。親鸞聖人が、主著である『教行信証』の総序で「偶（たまたま）行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」とおっしゃっていることも、この二人の出会いを思うと頷くことができます。

# 和讃（わさん）に学ぶ　第四十七回

徳法寺　杉谷　淨

## 寿命と身長

昨年、日本人男性の平均寿命が初めて八十歳を超え、八十・二一歳となりました。女性も過去最高の八十六・六一歳となり、こちらは二年連続の世界一です。平均寿命とは、この年生まれた子供が生きると予想される平均余命のことです。また、五十代半ばの私が、あと何年生きられるかと予測するためのものでもありません。

日本人の先祖とされている縄文人の場合、平均寿命は十二歳から十五歳と推定されています。縄文人といえば、眉間が突き出し、鼻の付け根が引っ込み、眉毛は濃く、目は大きめで、まぶたは二重、唇はやや厚めで顎の骨が発達しているという、彫りが深い顔立ちだったようです。ポリネシア人の祖先であるラピタ人の子孫ともいわれていますが、当時の人類としては平均的な寿命であったと思われます。縄文時代はおよそ一万年続きますが、この間、平均寿命は大きく変わっていません。江戸時代でも平均寿命は三十歳ぐらいだったようです。縄文時代から現代まで五千年ほどですが、この間に人間の寿命は五倍から七倍も延びていることになります。特に戦後の伸びは著しいものがあります。

ところが、親鸞聖人の和讃に次のようなものがあるのです。

数万歳の有情も
果報ようやくおとろえて
二万歳にいたりては
五濁悪世の名をえたり

人間の寿命は、始めは数万歳であったのに、次第に長寿をもたらしていた良い果報が衰えて、次第に二万歳の寿命しか得られなくなっていきました。『悲華経』には「人間の寿命が二万歳になったら、五つの濁りによる悪世である」と説かれていますから、この時から五濁悪世とよばれるようになったのです。

という意味です。『転輪聖王師子吼経』という経典にも、時代が経つほど悪業が積み重なり、人間の寿命が短くなっていくと説かれています。親鸞聖人は、これら仏典の言葉から、昔の人はずっと長生きだったと思われていたようです。

さらにこの次の和讃には身長のことも書かれています。

劫濁のときうつるには
有情ようやく身小なり
五濁悪邪まさるゆえ
毒蛇悪竜のごとくなり

劫濁となり時代そのものが濁ってしまったので、次第に人間の身体も小さくなってしまいました。五つの濁りや邪悪な出来事が世の中に溢れてしまっているので、人間の心の中は、まるで毒蛇や悪竜が暴れているかのように恐ろしいものになってしまいました。

という意味です。縄文人の身長は、男性で百六十センチ弱、成人女性で百五十センチ弱でしたから、今より小さかったのです。この後の時代に主役となる、平たい顔の弥生人でも平均身長は一六二～一六三センチぐらいで、縄文人よりも数センチ高いくらいです。親鸞聖人の時代では、源義経は百四十センチ台と小さかったようですが、楠正成は百八十センチでしたから、これも歴史的な事実とは異なっています。

どうして、仏典に昔の人が長寿で大きかったと書かれているのかは分かりませんが、仏教では時代と共に世の中が悪くなっていくと考えられていたので、昔の人は今の人より神や仏に近かったと思っていたのかもしれません。仏を守護する神である四天王は、寿命が九百万歳（厳密には五百年の寿命ですが、四天王の一日は人間の五十年に相当する、というのでこうなります。ちなみに信長が舞ったとされる「人間五十年・・」とはここからきており、人間の五十年など四天王の一日でしかない、という意味です）身長が三千六百五十メートル（富士山は三千七百七十六メートル）と書かれていることからも、このことはうかがわれます。

現代の日本は、これだけ長寿になっているのに「若者は今の年寄りほど長生き出来ない」という声を聞くことがあります。いつの時代にも「昔は良かった」という思いは同じなのかもしれません。

## 本の紹介

# 『キャパの十字架』

沢木耕太郎著

文芸春秋

「崩れ落ちる兵士」には二つの虚像が存在する。ファシズムに立ち向かった英雄の虚像と、伝説の戦場カメラマン、ロバート・キャパという虚像である。

青年の本名は、エンドレ・エルネー・フリードマンといった。ユダヤ系のハンガリー人の息子である彼は、やがてカメラマンになることを決意する。ヒットラーの台頭に身の危険を感じた彼は、祖国を離れ、フランスのパリに移り住む。

彼はそこでゲルダー・タローという三歳年上の女性と運命的な出会いをすることになる。

二人は、成功のための戦略を練った。彼らが考えたことは、アメリカの有名なカメラマン「ロバート・キャパ」なる架空の人物を作り上げることだった。そして、フリードマンを、ロバート・キャパの名で売り出すことにした。

彼女も、本名がゲルダ・ポホリレというカメラマンだった。タローは、当時パリで活躍していた日本人画家からもらったものだ。彼女は、名前の持つインパクトを十分理解する聡明な女性だった。

そんな時、スペインで内戦が勃発した。当時の共和国政府に対して、フランシス・フランコ率いる右派の反乱軍がクーデターを起こしたのだ。この一九三六年に始まった内戦は約三年間続くことになる。

結果共和国政府は打倒され、スペインでファシスト政権が樹立することとなる。その意味で、この戦いは、第二次世界大戦の前哨戦とも言われている。

キャパは、戦場カメラマンとして一旗揚げようと、ゲルダを伴って取材に出かけた。ところが、そう簡単に戦闘場面に遭遇できるものではない。そこで功を焦ったキャパは、兵士たちに戦闘の突撃シーンを演じてもらった。もちろんそれを本物の戦闘シーンとしてカメラに収めるためである。

しかしそこで思わぬことが起こった。一人の兵士が足を滑らせて、転倒したのだ。傍のゲルダは驚きのあまり反射的にシャッターを切った……。

「崩れ落ちる兵士」

現像してみると、あたかも兵士が銃弾に吹き飛ばされているように見えるインパクトの強い画像が現れた。これこそまさに、戦場写真の傑作「崩れ落ちる兵士」が誕生した瞬間だった。

その臨場感あふれる一枚の写真は、アメリカの雑誌「ライフ」に掲載されるや、全世界に衝撃を与えた。

一番驚いたのは、当人たちだったに違いない。キャパからすれば、この一枚がそれほどの反響を呼ぶとは全く予想していなかった。そもそもこれは、一連の戦場写真を「ライフ」で発表した際、表紙として何のコメントも付けずに用いたものだった。彼にすれば、本文ではなく「おまけ」で出した写真にすぎなかったのだ。確かに「崩れ落ちる兵士」というタイトルは付けたが、何が原因で兵士が崩れ落ちているのかについては、一切コメントしていないのである。

ところが、この写真は、ファシズムに立ち向かった勇者の姿をとらえた象徴的な一枚として独り歩きを始めた。フランコの暴挙を批判したものとして、ピカソの「ゲルニカ」があるが、それと並び称される戦場写真の傑作となってしまったのである。

そのことを二人がどう受け止めたかは、正確にはわからない。ただゲルダは、

## 杉谷淨のラジオ案内

七月七日（火）
八月四日（火）
九月一日（火）
十月六日（火）

ＦＭ-Ｎ１（七十六・三ＭＨｚ）で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便　住職のよもやま話」です。再放送は放送日の週の土曜朝六時からです。インターネットでも聞けます。

ロバート・キャパなる伝説のカメラマンを作り上げるために、自らの幸運を黙って恋人に差し出したことは確かである。そして彼女は、この十か月後に、皮肉にも共和国軍の戦車の暴走という事故に巻き込まれて死ぬのである。

そのことが、後のキャパの人生を決定づけることになる。「崩れ落ちる兵士」以上の写真を撮らなければならないという十字架を、彼は背負うことになったのである。

「波の中の兵士」

その後彼は、命の危機を省みず、追い立てられるかように戦場でシャッターを切り続ける。特にノルマンディー上陸作戦に従軍した彼は、「波の中の兵士」という写真を残している。この一枚は、彼の最高傑作と言われている。彼はこれを敵に背を向ける位置から撮っている。ということは、まさに我が身をナチスドイツの銃口にさらして撮った命がけの一枚なのである。

一方で、彼は、戦場でのみロバート・キャパでありえた。戦場は、生きている実感を持てる唯一の場所だった。彼は吸い寄せられるように各国の戦闘地域に足を運び、一九五四年五月二十五日インドシナで地雷を踏んで命を落とした。享年四十才だった。

以上は、沢木耕太郎が『キャパの十字架』の中で行った推論をもとに彼の足跡をたどったものである。二人が他界した今となっては、真実は闇の中だ。しかし「崩れ落ちる兵士」に違和感を感じる人は多く、その真贋については多くの研究がおこなわれている。本書において沢木は、何度も現場に足を運び、精緻な推論を展開している。その内容をお伝えできないのが残念であるが、そこにはまるで推理小説を読むような面白さがある。興味ある方は、ぜひ読んでいただきたい。

またJ・M・ススペレギ教授は、沢木に先立って「崩れ落ちる兵士」に疑問を感じ、研究を始めた人物である。もっとも彼は、兵士が倒れる場面そのものが、ポーズをとらせて撮った「やらせ」であると主張している。沢木とはその点ではすこし考えが異なる。しかし教授の「写真は嘘をつく」という言葉は、印象深い一言だった。

現在われわれのまわりは、キャパの時代とは比べ物にならないほど、膨大な画像であふれている。最近NHKの「やらせ」が問題となったが、人は映像によって真実を知る、と同時に映像に騙されやすいものであることを改めて思う。

キャパは、それにしても、本物のキャパになれたのだろうか。その判断は分かれるところだろう。しかし、その短い生涯は、写真の嘘に運命づけられた生涯だったと私は思う。（彰）

# 各寺のご案内

## ◆常　徳　寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

**◎秋彼岸**
九月二十三日（水・祝）
午後二時より

**◎報恩講**
十月十日（土）
お逮夜　午前十時
お日中　午後一時半
法話　佐々木　五六師

## ◆徳　法　寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

**◎お講（石坂同信会主催）**
毎月二十一日
午後七時半より
講師　七月　杉谷　浄
八月　藤場　一澄
九月　杉谷　浄
十月　桐山　信英

**◎秋彼岸**
楠天然　書画展
九月二十日（日）～
二十六日（土）まで

**◎秋彼岸中日及び永代経法要**
九月二十三日（水・祝）
午後一時より
講師　藤原千佳子氏
午後三時より
ネパール支援コンサート
スンダリ・ミカ＆
ヒマラヤバンド

**編集委員**
西山　彰（常徳寺）
杉谷　浄（徳法寺）